ブロック研究会　事後研究会の記録　　１８年　７月１４日（金）

人と自然とのかかわりを通し 子どもが「生きる力」を発揮する学習活動の創造　　＜1年次＞

いのち・環境教育ブロック　　１年１組　授業者　黄木洋子先生

(1)自評

・生活科の指導案から、道徳へ変えた。

・「おはなし葉っぱ」を」使わずに、観察カードからやればよかった。

・最後の話し合い（色水遊び）も、命あるものを粗末にしないようにと言わせたかった。

・緊張し、いつもの１組ではなかった。

(2)話し合い

・＜ N さんの様子＞

アサガオの活動に少しまざっている。なかなか、みんなにまざれない。真似することはできるが、話し合いは難しい。あさがおの葉のカードに、字は書きたい。

・子どもたちは、声が本当に聞こえると思っていたのでは。実際には聞こえてこないものだということをおさえてから、活動に移ればよかったのでは。

・観察カードから入ればよかったと言ったが、あさがおと対話する活動は大事だと思った。

・お話葉っぱに書くことで、対象と自分がかかわるということが良かった。

・同化され、本当に聞こえたのではなかったか。

・対話とは相手との会話というだけでなく、自分との対話であるともいう。

・最後の話し合いがおもしろかった。「夏休みの水かけをどうするか」

・あさがおに名前を付けたこともよい。よりかかわりが深くなった。

・ K さんは、あさがおのそばで、「うん。うん。」とうなずきながらきいていた。

・あったかかった。道徳の授業の意義があった。

・道徳で大事なことは、体験を生かすことだと聞いたことがある。今日の授業はまさにそれであった。

・子どもの頭では、生活科と道徳というちがいはない。

・子どもには、「あさがおの勉強」といっている。

・いのちブロックで、注目すべきことをはっきりすべき。目指す子ども像とはちがう、授業をする上で、意識して進むべきこと。

・今回の授業から明らかになったことは、

①動植物との「対話」は、対象との積極的なかかわりを生む。

②実体験の大切さ・・・・実際にあさがおを育てるということ

③記録活動の大切さ・・・かかわりを意識的なものにし、書くことによって、見えなかったものが見えてくる

・人との対話の前に、まず自分との対話が大事ではないか。
・アサガオとの対話は自分との対話だった。
・座席表から、「水かけしていない子どもは、対話ができていなかった」ことが分かる。
・水かけが毎日の対話になっていた。今日、元気ないなあなどと発見があった。
・かわいそうだという気持ちを育てていきたい。
・植物の世話ができないと、人ともうまく関われないようだ。
・うまくできない子には、どうすればいいのか。
・2年、3年とこのような活動を繰り返していく中で、育まれるのでないか。本来は家庭で育てるべきなのだろうが。
・道徳と生活科と内容をさらに、整理すると良かったか。
・うさぎのマリンが死にそうだ。いのちのブロックのありかたはこれでいいのか。
授業と実際が結びついていない。
・書く活動・・・1年生には横書きは難しいのでは。

＜貴木先生の授業から見えてきたこと＞

1　対象とのかかわりを生む「対話」活動の重要性
2　水かけが一生懸命でない子は、日頃もあさがおとの対話活動ができていないということ。
3　植物との世話（対話）ができない子は、友達ともうまくかかわれないようだ。
友達の心を考えられない。対話できない。
4　座席表に子どもの様子を記録することの大切さ。一人ひとりのかかわりの度合いを見るために有効。
5　いのちの授業を計画する上で、大切なことが見えてきた。
（＊いのちの研究をしながら、飼っているうさぎに無頓着でいいのか。）